

平成 29 年 5 月 22 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370768

研究課題名(和文) 近世期紀伊半島海民の多様かつ広域的生業形態とその近代の変容

研究課題名(英文) The various and broad-based forms of occupation of the fishermen of the Kii peninsula in the early modern times and their modern transformation

研究代表者

塚本 明 (TSUKAMOTO, Akira)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：40217279

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代から明治・大正期に掛けての、紀伊半島を拠点とする海民、特に女性の潜水漁業者＝海女たちが、居住する村を離れて盛んに出稼ぎに赴く活動の実態と出稼ぎ先への影響、その歴史的な変容過程を分析した。また、関連史料を集め、データベース化した。

江戸時代には、漁業資源が枯渇した時や初心者の修業目的で、熊野灘や房総半島へ赴く出稼ぎが一般的であったが、明治期以降には海藻需要の増大と中国への海産物輸出の活発化により、出稼ぎ形態は一気に広域化し、規模も拡大する。だがそれは、居村の生産構造を単純化させることにもつながったのである。

研究成果の概要(英文)：I analyzed the actual situations of the women divers who based on the Kii Peninsula and went to other districts as migrant workers in the periods between Edo (Tokugawa) and Meiji-Taisho, with references to the historical changes. In addition, I compiled the historical materials I had collected for the study into a database. In the Edo period it was common to emigrate to the nearby seashores in time of poor resource or for the educational purpose of training beginners. However, as the seaweed demand increased from the late Edo period, especially in the Meiji period when the export to China became active, migrant workers increased and their destinations were extended to the Korean Peninsula. This change also made their incomes increase, But, as a result, the original variety in the production structure of a fishing community became simplified.

研究分野：日本史

キーワード：海女 志摩 出稼ぎ 漁業 朝鮮出漁

1. 研究開始当初の背景

紀伊半島の漁民は、歴史的に先進的な技能を保持したため、近世前期に房総半島や東北地方に進出して優れた技術を伝える役割を果たしたことは、よく知られている。女性の素潜りによる海女漁についても、熊野灘や伊豆、房総半島に出稼ぎに出、近代以降には北海道や朝鮮半島にまで進出した事実も、明らかにされてきた。だが、それがどのような要因により、いかなる態勢で行われ、その結果地域社会にいかなる影響を及ぼしたのか、総じて広域的な出稼ぎの実態は不明なままであった。

その要因は、何より史料の乏しさにある。海女漁については従来、昭和期以降の聞き取り調査に基づいた民俗分野からの研究が中心で、村請制下の近世社会においては公式文書に登場しにくいこともあり、その歴史像はほとんど明らかにされてこなかった。そのため、近代の民俗誌で描かれた海女イメージが、歴史的に遡及される傾向も強い。また、志摩漁村社会における海女漁の位置付けも、考えなければならぬ。

2. 研究の目的

本研究は、近世の紀伊半島の海民、とりわけ志摩半島で潜水漁を営む女性＝海女及び海女漁と密接な関係を持つ小規模の舟を操る海民に焦点を当て、その多様かつ広域的な生業形態の実態と、参宮文化に依存した生産構造が、近代以降にどのように変容するのかを、在地史料及び近代行政文書・新聞資料等から考究するものである。この研究を通して、未だ稲作農業民や都市の町人に偏った日本民衆社会像を豊かにするとともに、漁業や海運の先進地であった紀伊半島沿岸地域の特質に迫ることを目指す。

海女漁については、近年世界的な見地で特有の生業として注目され、歴史性を持つ文化財としても評価されつつあるが、その歴史の実態を明らかにすることが課題として残されている。

そのため、分析成果として論考を公表すると共に、関連資料情報を集約し、広く学界・社会で共有できるように、基礎的な史料集を編纂する。

3. 研究の方法

鳥羽・志摩に残る「越賀区有文書」「石鏡漁協文書」「布施田文書」「浦村文書」「小浜文書」、熊野灘地域の「尾鷲組大庄屋文書」を中心とする文書、海民の出稼ぎ先に残る関連文書等の調査に基づき、近世段階の海女漁及び小舟を用いる生業の全体像を分析する。

次いで、神宮文庫や伊勢市が保有する神宮に関わる文書群から、海民たちの参宮文化との関わりを追究する。また、近代に掛けて彼

らが広域的な出稼ぎを行うようになる動きを、官庁文書、出稼ぎ地の行政文書、『大日本水産会誌』を中心とする水産関係の公刊雑誌類、新聞資料等を用いて検討を加える。

さらに、鳥羽・志摩と出稼ぎを通して関係を持ちつつも、各地で独自に海女漁を発達させている地について、県立図書館や県立文書館、県立博物館を中心に関連史料を探索し、海女漁の歴史の実態を調査し、比較検討する。

分析の成果は、随時「海女研究会」などの関連する研究者が集まる研究会等で報告し、緻密化を図り、論文にまとめて公表していく。

これらの分析作業に並行して、基礎的な史料のデータベース化を行い、重要な史料を翻刻し、最終的に史料集にまとめ、学界の共有財産とする。

4. 研究成果

(1) 近世期の海女漁の技能と特質

志摩海女の広域的な活動を分析する前提として、まずその漁の特質を検討した。海の博物館や鳥羽市立図書館、三重県史編さん室等で所蔵する史料及び『三重県水産図説』、『三重県水産図解』の挿絵などを分析することで、男女の分業関係や体温を維持するための工夫・装置について新たな知見を見出した。

特にフナド形態において、船上の男が引き竿を持ち、錨綱に足を掛け、海中からの海女の合図を待って一気に引き上げること、周囲の山の景観から漁場を特定して舟を操るなど、密度の濃い海女漁において男漁民の果たす役割についても注目した。焚火で焼いた石を小桶に入れて湯を沸かして舟中に備え、海上に浮上した際に体を温める工夫も確認した。男女の体の特質に応じた役割分担が認められ、極めて古い男女協働形態として、ジェンダー論にも影響を与えうる史実である。

また、漁村における年間暦や獲物の加工・販売について検討を加え、季節ごとに獲物を変え、天候や時期に応じて農業や林業、加工業に従事し、時には近隣に出稼ぎに赴く志摩の海女漁村における女性の生業の特質を明らかにした。特に、アワビを熨斗鮑に加工し、またテングサなど海藻類を晒し草にして販売する様相を見出した。これらの加工は、主に海女漁を営む女性が行っていたものと考えられる。生のアワビは地元商人が買い取って伊勢・河崎や参宮街道の諸都市、名古屋、熱田へ販売に赴くのだが、熨斗鮑は地元志摩で入札に掛けられ、伊勢の熨斗問屋が買い付けにやってくる。晒し草に加工された海藻類も同様に大坂・京都の外部商人が独占的な集荷を求めて志摩半島の村々と交渉してきた。地元で加工することにより、外部の商人に有利な条件を確保できたのであり、いわばローカル経済において「六次産業化」が行われていたことを見出した点が意義深い。

更に、海が荒れた時や冬場に山仕事に従事

している点に注目した。これは、潜水業の前後に体を温める際に用いる薪を確保するためであり、余った分は伊勢の河崎へ出荷されており、御師邸において参宮客向けに大量の調理をする際などに用いられたものと考えられる。

また、出稼ぎに関しては、男漁民が熊野灘の捕鯨漁や鰯網、廻船乗り、舟大工など、ほぼ海のなりわいに関するものばかりであるのに対し、女性の出稼ぎは茶摘みや稲刈りなど海の生業を越えて幅広いものであった点も注目される。

以上の分析成果は、「古文書史料にみる海女漁の「技能」と題して、『海女習俗詳細調査報告書』（三重県教育委員会、2014年）に公表し、また概要を「志摩における近世・近代の海女漁の特質」の題目で、日本水産学会秋期大会において口頭発表した（その要旨は『日本水産学会秋期大会講演要旨集』80に掲載）。

（2）近世期の出稼ぎ関係史料について（海女関係の史料集）

出稼ぎ関係史料を含め、志摩海女に関する史料を網羅的に編集した史料集を公刊した（『近世の志摩海女に関する基礎史料集』、『三重大史学』17号、2017年）。

これまで鳥羽・志摩地域や行政機関、また公刊された史料集などから見出せた海女に関する史料を、「海女漁の形態と技術」、「海女の年間暦」、「海女の出稼ぎ」、「海女漁と村々（争論と海女漁）」、「海女の多様ななりわい」の5項目に分類して編集した。今後の研究の基礎史料となるべく、各史料は厳密な翻刻を行い、加えて史料ごとに出典や内容上の注目点などを記した解題を付し、利用の便宜を図った。

過去に中田四朗氏が研究した、海藻や熨斗鮑など海女獲物の流通に関する史料については、紙幅の関係で省略せざるを得なかった。ただ、中田氏が論考のなかで多くの史料をそのまま紹介しており、それらの論考を記すことで代替させた。これにより、志摩海女に関する分析の基礎史料を学界の共有財産とすることができたと考える。

（3）近世期の出稼ぎ形態について

近世段階の志摩海女の出稼ぎについて、その要因と時期的な変化、居村及び領主との関係、漁獲物の流通などについて分析を加えた。

志摩海女が江戸時代に熊野灘や伊豆、房総半島に出稼ぎに赴いた事実は、これまでも指摘されてきた。だが、資源豊かな漁場に恵まれた志摩海女が、なぜ居村を遠く離れて出稼ぎに赴いたのか、それはなぜ可能であったのかを検討した。

居村を離れての出稼ぎで最も規模の小さなものは、志摩国内の他の村へ出稼ぎに出る形態である。英虞湾に真珠玉（アコヤガイ）を目指して行われるもののほか、「忍び」で潜るとする形態もある。海女漁が不在かさほど活

発ではない海域に赴くものであろう。

関東へ出稼ぎを「上磯稼ぎ」と称したが、この形態は17世紀後期の史料で確認できる。フナドを務める男の「海土頭」に率いられ、恐らくは藩公認の下での出漁であった。石鏡村の明細帳では、地元で夏の漁期を終えた後に、男17名、女18名が房総半島に出稼ぎに行っていることが記されており、男女ペアのフナド形態での出稼ぎであったことを思わせる。海女舟で遠く房総まで航行したであろうことも、推測される。石鏡村の規模からすれば、村民の2割に当たる漁民が、房総半島に出掛けていた。だが、18世紀半ばには上磯稼ぎは衰退していったものと思われる。

一方、熊野灘沿岸へ出稼ぎを「下磯稼ぎ」は、伊勢国内の紀州藩田丸領などへは、10日から20日間ほどの短期の出漁で、これは領主に届け出ずに毎年行われていた。地元漁民との競合関係もなく、漁況次第で行われたものらしい。1艘の舟に10数人の海女が乗り合いで出掛けているが、出稼ぎ先でアワビを熨斗鮑に加工し、村へ持ち帰っている点が重要である。

さて、出稼ぎに際して村との関係はいかなるものであったか。志摩の漁村では「口銀」という徴税制度があった。これは、漁獲物等の取り引きに際して、売買の双方から一定額を村が徴収し、年貢納入や村財政に備えるものであり、近代以降も引き継がれた。出稼ぎに際しての口銀規定が、越賀村の18世紀前期の史料に見られるが、海女の技能に応じて上中下の等級に分け、口銀の額を設定している。なお、「磯手習い」という未熟な海女については口銀が免除されていた。これは海女漁の技能を習得するために若い女性が修業に赴いたのだという説を傍証するものである。ただし、上中下の等級が分けられていることから明らかのように、修業以外にも出稼ぎに出ており、これは居村での漁期を終えた後や、磯荒れに際して行われるものであった。

同じ「下磯稼ぎ」=熊野灘へ出稼ぎ海女漁でも、尾鷲組等へ出漁は比較的長期にわたるものであった。19世紀初頭の「尾鷲組大庄屋文書」に記録される尾鷲組須賀利浦と相賀組島勝浦の争論史料からは、この海域で17世紀から志摩の海女が組織的に出稼ぎ漁を営んでいたことが確認できる。島勝浦では、「海土宿」という、恐らく出稼ぎ海女たちが集団で寄留した施設が存在していた。

注目されるのは、50名あまりの海女たちを率いた「梶取」との肩書を持つ5名の男たちが、磯場の漁業権を買い受けて出漁した、としている点である。旧稿で明治・大正期の熊野灘への海女漁出稼ぎが「磯買い」という契約関係に基づいていることを指摘したが、その形態は江戸時代半ばには成立していた。ただし、近代期には地元の請負人が磯の権利を買い取り、志摩海女を雇用して経営したものの、近世期には志摩漁民が権利を取得している。「磯買い」形態の変容過程は、今後の課題

である。

漁業としての出稼ぎのほか、特殊な事例として、海底探索に動員された事例を2例紹介した。ひとつは寛政11(1799)年に將軍徳川家斉の要請を受けて紀州藩が珊瑚珠の探索をした際に、尾鷲組では網や特殊な採取道具を用いてもうまくいかず、結局、志摩の海女を呼び寄せて潜らせてみた事実である。もう一件は、文化元(1804)年に木本組二木島で発生した盗難事件の捜査過程で志摩海女が動員されたもので、嫌疑を掛けられた者が品物を海中へ捨てたと答えたために実施された。これらの事実は、海中深く潜る技能は海女のみが持つ特殊なもので、漁業が盛んな地域においても、一般の漁民ではなし得なかったことを知る。

なお、この調査に際して海女の技能に関心を持った木本代官の指示により、海女漁の実態についての聞き取り調査が大庄屋の代理によって行われた。この記録は、江戸時代の海女漁の実態を示す文字資料としては極めて貴重なもので、上記の論点の叙述と共に、「近世志摩海女の出稼ぎについて」(『三重大史学』15号、2015年)に全文を翻刻して紹介した。

(4) 朝鮮出漁の形態とその影響

明治中期以降に志摩海女は朝鮮半島にまで出稼ぎに赴くようになる事実は旧稿でも触れたが、ここではそれが日本及び韓国の海女漁及び海女漁村の生産構造に及ぼした影響を検討した。分析の過程で、近代以降現在に至るまで水産関係者の情報が集約された雑誌媒体『大日本水産会報』を東京海洋大学附属図書館で閲覧し、明治期を中心にその三重県関係の記事を検索した。未完成ではあるが、いずれデータベース化を図りたい。

明治期に日本漁民が朝鮮海へ盛んに出漁したのは、侵略的な国策に後押しされたことに加え、何より漁業資源が豊穡であったためである。これは食文化の違いにより韓国における漁業技術が未発達だったことに起因する。この点は済州島を拠点とする海女漁も例外ではなく、いまだ磯眼鏡を用いず、農地向けの肥料に用いる海藻に重点があった。

鮑や海藻を獲る潜水漁は、当初潜水器を使用した男を担い手として始まった。だがそれは乱獲を招き、多額の設備投資に見合わなくなり、衰退していく。それに代わる形で、女性、とりわけ志摩海女を中心とする裸潜水業が展開する。男の潜水業に比し地元とのトラブルが少ないという利点も存在した。

韓国の研究者も指摘するように、志摩海女の出稼ぎが契機となって済州島の海女人口は増加し、朝鮮半島への進出も活発になる。これは中国向けの海産物の商品価値が高まり、流通が活発になったことに起因する。そして、志摩海女も済州島の海女も、朝鮮半島においては乱獲気味の漁を営むことになる。

志摩海女の出漁形態は、当初は「共同組織」と言われるものであったが、次第に外部資本家の雇われる「被雇組織」という形態に移行する。事業主が雇用する海女の渡航・船舶・滞在中の食料等の一切を準備するが、海女から独占的に買い上げる漁獲物の代価は、驚くほど低いものであった。しかし、資源の豊富さから、それでも志摩海女の手にする金銭は小さくはなかった。

海女漁に限らず、この時期の日本漁民の進出は、朝鮮半島沿岸の住民との頻繁な衝突を引き起こした。武力衝突だけでなく、風俗習慣の違いに基づく文化的な衝突も発生した。だが同時に日本の漁業技術が伝播し、朝鮮半島漁に富をもたらしたことも事実である。

さて、朝鮮出漁が海女たちに及ぼした影響の最たるものは、これを契機に居村の生産構造が大きく変容したことだと考える。大正期の志摩漁村の史料には、元々農業を主とし、漁業を副とする村であったが、近年は漁業に熱狂する傾向があり、漁業を専業とする人口が急増し、農業が顧みられない状況であることを指摘する文がある。それは偏に水産物価格が高騰したことに原因があり、また漁業者のなかでもとりわけ海女漁について顕著であった。女性人口が男性に比し大きく上回る現象も認められる。民俗調査や近代期の新聞報道で紹介されたように、近隣から幼い女子を養女として取り、海女に仕立て上げる習俗が行われたのである。

海女たちの朝鮮出漁は、大正期末には資源が枯渇し、衰退する。資本家に雇用されての出稼ぎ、しかも侵略的な国策に基づくものは、乱獲に陥ることが避けがたい。自分たちの海として資源を守る意識が欠如するからである。そして、江戸時代には小規模ながら多様な仕事の組み合わせで営まれていた海女のなりわいは、生産規模自体は大きくなったものの、事業主に雇われて魚貝を獲るだけの形態に単純化してしまった。なお、これらの点は、朝鮮半島に進出した済州島の海女たちも、基本的に同じ課題を負ったものと考えられる。

一度放棄された農地を再度開墾することは、多大な労力を必要とするため、朝鮮出漁の衰退後、海女たちが元の生業形態を取り戻すことは困難であった。資源を獲り尽くすような出稼ぎ漁、資本家に雇われ、貝や海藻を獲るだけの漁、他の生業を営まぬ漁業の専業、いずれもそれらは、一時的には大きな収入をもたらしたものの、本来の海女文化から大きく逸脱するものであった。

以上の論点を見出した点が、4年次にわたる本研究の成果であるが、これらは紀伊半島漁業史のみならず、近代の朝鮮出漁の評価という点では、朝鮮史の研究者との間で議論すべきことだと考える。また農業・林業との組

み合わせで漁業を考える視点の提示などの点で、次の段階を見通すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6件)

塚本明 近世志摩海女に関する基礎史料集、三重大史学、査読無、17号、2017、1-36

塚本明 近代志摩海女の朝鮮出漁とその影響、三重大史学、査読無、16号、2016、25-48

塚本明 近世志摩海女の出稼ぎについて、三重大史学、査読無、15号、2015、19-30

<http://miuse.mie-u.ac.jp/bitstream/10076/12233/1/10C16109.pdf>

塚本明 古文書史料にみる海女漁の「技能」、海女習俗調査報告書 鳥羽・志摩の海女による素潜り漁、三重県教育委員会、査読無、2014、81-93

〔学会発表〕(計 2件)

塚本明 海女は古来、なぜ人を惹き付けてきたのか、三重大学先端研究シンポジウム、東京都市センターホテル(東京)、2013、12、3

塚本明 志摩における近世・近代の海女漁の特質、日本水産学会秋期大会、三重大学(津市)、2013、9、22

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

塚本 明(TSUKAMOTO Akira)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号: 40217279

(2)研究分担者(なし)

()

研究者番号:

(3)連携研究者(なし)

()

研究者番号:

(4)研究協力者(なし)

()